

中国の漢字

貝塚茂樹
小川環樹

日本語の世界
3

中央公論社



日本語の世界 3

中国の漢字

定価一八〇〇円

昭和五十六年三月十日印刷
昭和五十六年三月二十日発行

編者

貝塚茂樹
小川環樹

発行者

高梨 茂

印刷者

山元 悟

発行所

中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二丁目一七
番 振替東京二二三四
©一九八一 検印廃止

中国の漢字
目次

漢字の起源

貝塚茂樹

3

一 造字伝説 4

漢字の発生 倉頡造字伝説の解釈

二 西方起源説 9

西方起源説とマスベロの批判 新石器時代文化の再検討

文字一元論の仮説

三 漢字スモール起源論 17

古代都市文明と文字の発明 絵文字から表音文字へ

四 新石器時代の土器文字 22

彩色土器に刻まれた原文字 大口尊に彫られた絵文字

五 二里頭文化と殷前期文化の土器文字 26

二里頭文化——王朝国家の原型 二里岡文化——拡大された支配領域 周鼎異民族との接触

六 甲骨文字の出現 36

殷代文化の編年 占卜技法の確立と卜辞 甲骨文字と冊書の先後

七 最後に 45

文字の発展 甲骨文字と原中国語

漢字の構成

吉田 恵

49

一 文字構成の手順

50

「形・音・義」結合体 構成手順の分類——「六書」

二 象形さまざま

53

略画文字 文字の形体を新たに作る 既成文字を組み合わせる
非文字とを組み合わせる 既成文字を変形する 既成文字と

三 非象形の手順

74

指事 物体の部分を指さす 「事」を「象」る 会意 既成文字の向きを
逆にする 既成文字の意味と象形的形体との組み合わせ 形声 形声と象形
の二重使用 象形＋声 会意＋声 会意亦声 象形亦声 仮借 古文
の形体を変化させる

四 おわりに

100

残された問題——転注のことなど

漢字の音韻

尾崎雄二郎

103

一 漢字と声調

104

意味と結びついた音 四声の発見 日本漢字音における入声末尾音 沈約の
時代の入声

二 漢音と吳音¹¹¹

吳音の特色は濁音 連濁 資料としての日本漢字音

三 『切韻』——反切のある世界¹¹⁷

双声と疊韻 古音字の分部 重紐 日・朝・越漢字音に見られる区別
の押韻 文字化の段階における変形 人工的区別の可能性 等韻図 詩

四 『切韻』——フィクシヨンとしての「体系」¹³²

三十六字母 等位の別による字母の使い分け 『切韻』の仮構性

五 『切韻』——その体例の意味するもの¹⁴³

『切韻』のもとになった五種の韻書 捨象された時間の距たり 『切韻』の韻序
韻目排列の原理——悉曇学との関係 韻序を一貫する説明は不可能か 体例に
は必ず意味がある 入声における四声相配の「乱れ」 なお残る難問——咸攝
と止攝・遇攝 音韻論的解釈——一つのフィクシヨン

六 「まとめ」に代えて¹⁶⁷

「用」ではなく「体」を 漢字は日本人にも「いま」の問題

漢字の表現

一 符号と文字、そして文章¹⁷²

陶器上の刻文 金文中の図象記号 金文・甲骨文的文章形式 祭る者と祭ら

小南 一郎

れる者 単音節の孤立語

二 四六駢儷文 185

文章に内在するリズム 読みにくい『尚書』の文章 読解の鍵としてのリズム
基本単位となる四字句 六字句を交える 対偶表現 羅列的描写と論理的展
開と 典故の使用 音韻の面での洗練 美文意識 駢儷文の行きつまり

三 白話文 210

白話文と文言文 助辞の占める位置 微妙なニュアンス 口語的表現の有効
性 義疏の文章 長篇小説の描写 内容と表現との矛盾

中国の字書

小川 環樹

231

一 字書の三類と識字教科書 232

『爾雅』 『史籀篇』 『倉頡篇』 『急就篇』 分類語彙としての性格

二 『説文』 238

「文」と「字」 部首 説解

三 六朝時代の字書 244

『字林』『玉篇』『玉篇』の変形 『千字文』 韻書の始まり

四 唐代の字書 254

『開元文字音義』 『干祿字書』 『五經文字』 『九經字樣』

五 宋・遼・金・元時代の字書 260

『類篇』 『龍龕手鑑』 仏者の字書 『四声篇海』 『字通』

六 明代の字書 273

『字彙』 『洪武正韻』との関係 『正字通』

七 清朝以後の字書 280

『康熙字典』 民国以後の字書

楷書の生態

藤 枝 晃

287

一 序 説 288

楷書とは 楷書の生態とは 楷書の資料——写本と石刻

楷書書体の変遷

二 隸書から楷書へ——北朝の楷書 291

北朝風 最古の北朝有年紀写本 六世紀初の敦煌鎮写経

三 初期楷書——南朝・隋の楷書 297

南朝体の発見——北朝体との違い方 最古の南朝写本の発見
隋の宮廷写経 楷書のはじまり

四 楷書の極相——唐の楷書 304

楷書の標準書体 宮廷図書館と官立学校 書物の流布 唐の宮廷写本

五 楷書の正体化運動 311

正体楷書の追求 『顔氏字樣』から『干祿字書』へ
『正名要録』 『字樣』殘卷の発見

六 楷書正体化運動の影響 319

開成石經——一つの到達点 新体楷書制定の波紋

七 印刷以後 323

初期印刷 見る字と書く字との分離 楷書と書芸術

八 結論——楷書と現代 327

日本における楷書 楷書の危機

文字改革

大原 信一

335

一 文字改革とはなにか 336

毛沢東と文字改革 なぜ文字改革ははじまったか

二 文字改革のはじまり 339

黄遵憲の『日本国志』 ローマ字による表音化 官話合声字母

三 漢字改革と漢字革命 347

現代中国語の形成 注音字母と国語統一 漢字革命と国語羅馬字
新文字 簡体字運動 ラテン化

四 解放後の文字改革 358

文字改革の新段階 過渡期への対策 共通語の問題 ローマ字の制定 異
体字の整理 漢字簡略化はじまる 漢字簡略化の進展 民間の新簡体字
第二次漢字簡略化はじまる 草案にたいする反響 漢字はどうなるか

参考文献 383

あとがき 384

索引 392

中国の漢字

漢字の起源

貝塚茂樹

一 造字伝説

漢字の発生

漢字はいつ、どこで発生したのであろうか。文字は話された言葉を目に見える形で固定化して、永久に伝える手段である。言語は社会的集団、いわゆる言語共同体が長い年月の間持続した社会慣習の結果生み出した音声記号の体系である。文字はこの一次的な聴覚的記号に対応し、これを視覚的記号に置きかえた二次的記号、つまり記号の記号だとされている。一次的記号である言語は現在全世界に住むどんな未開民族でももっているのに対して、二次的記号である文字は、限定された民族しかもっていない。話されることばは、言語共同体をなす一つの民族のなかで生まれ育つのが常態であるのに対して、書かれたことば、つまり文字の方は、文化の進んだ特定の民族によって発明され、文化の遅れた異民族の間にひろく伝播されてゆく傾向をもっている。

漢字はいつ、どこで発生したかと旧中国の伝統的な教養人にたずねたとすると、彼はたぶん、古代の聖人黃帝の御代に記録をつかさどる役目をしていた倉頡（そうけつ蒼頡）というひとによって発明されたと言下に答えるにちがいない。ところがこれはあまり古い史料に出てくる伝承ではない。

というのは、春秋時代の終りごろ、前五五二年前後から前四七九年に在世した孔子が儒教の正統の教科書として編纂した『詩』『書』の本文のなかに、また彼の弟子たちが孔子の言行録として編輯した『論語』の原本と見られる部分にも、古代の有名な聖人皇帝である堯・舜の名は出てこないし、それよりも昔に溯って五帝の初めである黄帝は全く言及されていない。そこで、倉頡という人名はいちおう黄帝と切り離して考えねばならない。

戦国時代末期の諸子百家の最後の大思想家である荀況の著わした『荀子』の「解蔽」篇には、書を好むものは多数いたはずであるのに、倉頡の名だけが後世に残ったのは、彼が書道に専心したからだ、といって、黄帝は引合いに出されていない。彼の弟子で彼のもとを去って秦国に入国し、秦始皇に仕えた韓非の著述とされる『韓非子』は、諸子のなかでは始めて黄帝に言及しているのに、その倉頡を黄帝と無関係で、当時の人ではなく、習字の手本、つまり字書を書いた昔の書の名人だと考えている。韓非とともに荀子に学んだ同門の李斯も秦国に仕えて、有能な韓非を排斥し、秦始皇に取り入って首相の座についた。秦始皇が六国を征服して、天下を統治するようになる、諸国に行なわれていた、それぞれ多少ちがった書体を統一する必要が起ってきた。彼はかつて韓非が推賞していた昔の能書家倉頡の手本をもとにして、これを『倉頡篇』と名づけて天下に頒布し、新書体の標準としたらしい。

秦国には周の宣王の史官の長である太史籀の作ったという『史籀篇』が伝えられていた。李斯は韓非とともに東方の楚国で荀子に学んでいたころ、そこで流行していた倉頡の書体を取り入れ、

従来の秦国の『史籀篇』の大篆だいてんという旧式の書体を改良し、新たに版図に入った東方の六国にも通用しやすい『倉頡篇』として標準書体に採用したのであろう。『漢書』「藝文志」によると、古字が多く含まれていたために、前漢の半ばごろになると、一般の字の先生には読めぬ字が出てきたので、東国の齊せの人を師匠としてその読み方を習わせたといっている。これは、『倉頡篇』という字書に東国系の書体、いわゆる古文が混っていたことを示している。

『倉頡篇』は唐代の開元（七一三—七四一）年間までは確かに全篇が残っていたらしく、日本にも伝来して『日本国見在書目録』にも登録されているが、どちらでもその後の兵乱のために亡んで、わずかに佚文の輯本によって、その一端を知るだけだった。羅振玉が、スタインが西域の敦煌とんこうから発掘した漢代の竹簡のなかから、『倉頡篇』の遺文四簡を検出して、内外の古典学者を驚倒させた。『倉頡篇』は四字一句をなして六十字一章、全部で八十九章、五千三百四十字から成ることも推定されている。その後、西北科学考察団が居延で発掘した大量のいわゆる居延漢簡のなかから、勞榦が『倉頡篇』の二十簡を見出した。それによると、「倉頡書を作って、もって後学に教う……幼子詔書をうけて、謹慎敬戒せよ……」と述べている。秦国の首相李斯らが編したという『倉頡篇』が、倉頡の著とされ、漢帝国に伝えられて、若い学生たちに文字を教える教科書として用いられていたことが明らかにされた。

倉頡造字伝説の解釈

東方の齊・魯の古文の混ったこの文字の教本の作者とされる倉頡自身はいかなる人物であろうか。後漢の許慎の『説文解字』の序文には、黃帝の史